

平成29年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立金沢錦丘高等学校

【重点目標1】中高一貫教育の特長を生かし、高い進路目標に向かって邁進する生徒を育て、その実現を図る。			
具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
① 校外模試等の結果を教科会や学年会で分析し、生徒にフィードバックするとともに、1ランク上の志望を持たせることにより学習意欲と学力の向上を図る。	1、2年生校外模試の3教科全国偏差値60以上の生徒が A 30%以上である B 25%以上である C 20%以上である D 20%未満である  3年生10月記述模試で5教科全国偏差値が文系で56以上、理系で54以上の現役生徒が A 35%(110人)以上である B 29%(90人)以上である C 23%(70人)以上である D 23%(70人)未満である	1年生1月進研模試 【判定：C】 3教科SS60以上 71名 (22.0%) (昨年同期 105名 29.7%)  2年生1月進研模試 【判定：C】 3教科SS60以上 71名 (20.1%) (昨年同期 73名 23.6%)  3年生10月進研模試 【判定：B】 5教科文系SS56以上 47名 5教科理系SS54以上 46名 合計 93名 (30.1%) (昨年同期 75名 24.8%)	1年生(8クラス)については、SS78以上に4名、SS70以上は10名であり、上位層は例年並みまで回復した。しかし、SS62付近から層が薄くなり、SS60以上は7名と、過去5年間で最低値となっている。次年度に向けて、全体的なレベルアップを図る必要がある。 2年生(9クラス)については、1年次より下位層が重い分布となっている。SS70以上7名と前回の10月進研模試よりも4名減少し、SS60以上も前回より6名減の71名となっている。今後は、さらに成績層別の指導などに工夫し、上位層を育て、中位層を持ち上げることを目指したい。 3年生(8クラス)については、昨年度を上回り判定はBとなっている。7月で懸念された英語の成績は昨年度並みに回復し、数学の成績は文理とも昨年を上回っている。更に実践力をつけさせ、個別添削指導などを丁寧に行っていくことにする。
	1、2年生で難関大を志望する生徒が A 55名以上である B 45名以上である C 30名以上である D 30名未満である	1月進路志望調査によると、難関大志望者は 1年生 57名 【判定：A】(昨年同期55名) 2年生 57名 【判定：B】(昨年同期53名) *2年生は9クラスなので、判定Aは61名以上、Bは50名以上、Cは33名以上とする。	最終的な合格者数を伸ばすには、早期に高い志を抱かせることが大切だと考える。1年生については、ここ3年間でもっとも多い57名(S生40名、T生17名)が難関大を志望している。生徒同士が切磋琢磨できる環境を作っていきたい。 2年生についても、難関大志望者は57名(S生40名、T生17名)となっている。これまでと比べると、T生発展クラスの難関大志望者数が少なくなっているため、高い目標をもって3年生に向かうように指導していきたい。
② 難関大学を中心とした高い進路志望の実現のため、入試分析や補講・添削等のサポート体制を強化する。	東大・京大及び国立医学科の現役合格者数が A 3名以上である B 2名である C 1名である D 0名である  難関大及び金沢大の現役合格者数が A 70名以上である B 50名以上である C 30名以上である D 30名未満である	超難関・国立医学科の合格者数 【判定：B】  難関大および金沢大の合格者数 【判定：C】	*東大・京大・国立医学科の現役合格者は2名(京大1名、金沢大1名)であった。  *現役生の難関大合格者は11名、金沢大合格者は23名、合計34名であった。
③ CU(土曜補習)、補習を通して、より意欲的な学習の在り方へと切り替えさせる取り組みを行う。	「CUや補習は自分の学力向上に役立っている」と思う生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	生徒アンケート(後期) 「学力向上に役立っている」62% (当てはまる16%+やや当てはまる46%) 【判定：C】	前期と比べて-5%、昨年同期と比べて-3%であり、やや下降気味である。CUは基礎力の充実と応用力の向上を目的としており、普通の授業では十分に指導できない補足的または応用的項目に取り組みさせることによって、生徒の意欲を引き出し、充実感を与えるように工夫を重ねていく必要がある。

④ 中学校との情報交換や指導記録も適切に踏まえ、学級担任や学年主任、教科担任等による積極的な面談を行う。	「ホーム担任や教科担任との面談によって、自分の学習姿勢により良い変化が生まれた」と思う生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	生徒アンケート（12月） 「より良い変化が生まれた」72% （当てはまる22%+やや当てはまる50%） 【判定：B】	前期と比べて-2%であった。生徒アンケートの別項目「学校は、学習に対する質問や悩みに対応してくれている」の肯定的評価も前期と比べて-3%であった。前期は、昨年同期に比べて改善したが、後期は昨年同期と同じ水準に戻った。今後も職員間で連携をとりながら、学習意欲を高めるような面談等を行ってきたい。
⑤ 中高一貫教育校として6年間を見通した学習指導や進路指導を行う。	「中高一貫教育校として、6年間を通じた指導方針や指導方法の共通理解と実践に、教科で取り組んでいる」と思う教員の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	職員アンケート（12月） 「取り組んでいる」61% （当てはまる10%+やや当てはまる51%） 【判定：B】	前期と比べて+6%、昨年同期と比べて+1%であった。今年度1年間の流れの中で、後期に改善されたことは良かった。中高接続に関する教科・行事PTを立ち上げ、取り組みについて明確な方針を示したことが改善された要因の1つである。本校のミッションである6年間を見通した学習指導と進路指導について、さらに検討を進めたい。
学校関係者評価委員会の評価	・大学が求めるものとして、情報を取り込んで、組み立てて、わかりやすく伝えるといった基礎的な力がある。これはトレーニングだけではなく、原理原則を自分なりに解釈することで身に付けていかなければならない。このようなコミュニケーションの基盤となる力を中高一貫教育で鍛え上げていくことが、錦丘の特色となる。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	・全員が本格的に課題研究に取り組むように準備を進めている。授業と課題研究を錦丘中高一貫教育の柱として、あらゆる学習活動において、コミュニケーションの基盤となる確かな力を鍛え上げ、進路実現に繋げたい。		

**【重点目標2】教科指導の質的向上に努めるとともに、あらゆる教育活動を通して生徒の論理的思考力や表現力の伸長を図る。**

具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
① ICTの効果的な活用やアクティブラーニングの手法を取り入れながら授業改善に取り組み、生徒に基礎的・基本的な事項を確実に習得させるとともに、論理的思考力や表現力の育成を図る。また、各教科の特質を踏まえた言語活動を通して、「コミュニケーション力」の育成を図る。	「他の教員の授業を参観したり、自分の授業を参観してもらった上で意見を伺ったりして参考になったと思える回数が、錦丘中との交流を含め、年間4回以上あった」と思う教員の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	職員アンケート（12月） 「各学期に3回以上あった」39% 「各学期に2回以上あった」39% 【判定：A】	前期と比べて+13%、昨年同期と比べて-6%であった。「他の授業を見ることは合わせ鏡のように自分自身の授業を見る目になる」と言うこともあり、手軽に相互に授業を参観できるような機会を多く設け、活発な意見交換を通して授業改善に繋がるようにしたい。また、錦丘中の公開授業や初任者研修等も利用していきたい。
	「授業でICTをよく活用している」「時々活用している」教員の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	職員アンケート（12月） 「活用している」79% （よく活用している61%+時々活用している18%） 【判定：A】	前期と比べて+5%、昨年同期に比べて+2%であり、改善が見られた。プロジェクターの教室配置や、地歴・公民科と外国語科に加えて、理科と数学科に職員用のタブレット端末が配付されたこともあり、授業で使用する職員が確実に増えている。教科や職員間でまだ格差はあるので、教材や使用方法について情報共有を進めていきたい。
	「ICTを活用した授業により、学習効果が高まっている」と思う生徒の割合が A 65%以上である B 55%以上である C 45%以上である D 45%未満である	生徒による授業評価（12月） 「高まっている」62% （当てはまる31%+やや当てはまる31%） 【判定：B】	前期と比べて+8%であった。A評価には届かなかったが、アンケート項目に入れてから3年間数値を伸ばし続けている。今後も単にICT機器を使用することではなく、タブレット端末も含めて、効果的な活用に繋がるよう、教員のスキルアップを図りたい。
	「授業の中に論理的思考力や表現力を伸ばす場面がある」と思う生徒の割合が A 85%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	生徒による授業評価（12月） 「伸ばす場面がある」80% （当てはまる31%+やや当てはまる49%） 【判定：B】	前期、昨年同期と比べて、ともに+2%であった。肯定的評価の数値は低くはないが、目標には到達していない。各教科で、求められる論理的思考力や表現力がどういうものかを共有し、それを育成するための授業デザインについても検討が必要である。これからの高大接続改革の対応に向けても、授業改善を推進したい。
	「授業の中に話し合いや発表などを通してコミュニケーション力を伸ばす場面がある」と思う生徒の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	生徒による授業評価（12月） 「伸ばす場面がある」73% （当てはまる34%+やや当てはまる39%） 【判定：A】	前期、昨年同期と比べて、評価に変化は殆どなかった。教科別（前期/後期）では、国語79/76%、地歴公民70/75%、数学61/63%、理科46/51%、外国語90/91%、保健体育73/70%であった。コミュニケーション力はキャリア教育の視点からも育みたい能力であり、今後も言語活動を重視したアクティブラーニング型授業に学校全体で組織的に取り組み、改善に繋げたい。

<p>② 教科や総合的な学習の時間の内容を関連させ、表現トレーニング、プレゼンテーション、多文化共生理解などに取り組むことで、論理的・批判的に事象をとらえ、自らの考えを述べる力を育成する。</p>	<p>「さまざまな世界的・社会的事象に対して、より関心を持つようになった」と思う生徒の割合が  A 70%以上である  B 60%以上である  C 50%以上である  D 50%未満である</p>	<p>生徒アンケート（12月）  「関心を持つようになった」59%  （当てはまる11%+やや当てはまる48%）  【判定：C】</p>	<p>前期、昨年同期と比べて、評価に変化は殆どなかった。今年度も実施している「ふるさとに学ぶクリエイティブ人材育成事業」「おもてなし講座」等に加えて、課題研究の「錦丘ゼミ」など、社会との関わりを扱う学習が評価に繋がっている。今後は、総合的な学習の時間等で行う課題研究を充実させ、社会的な事象に主体的に関わる姿勢を育みたい。</p>
<p>③ 高校の各年齢段階で求められる知識・教養・感性を身に付け、文章の理解力・表現力を育成するために、読書を奨励する。特に、各教科と連携し、読書指導を授業やシラバスの他、あらゆる機会をとらえて行うことによって推進する。</p>	<p>「授業やシラバスの他、あらゆる機会をとらえて、生徒に適した書物を紹介し、読書量を増やすための指導をしている」教員の割合が  A 50%以上である  B 40%以上である  C 30%以上である  D 30%未満である</p>	<p>職員アンケート（12月）  「生徒の読書量を増やすための指導をしている」39%（当てはまる7%+やや当てはまる32%）  推薦図書を紹介冊数 平均2.4冊  【判定：C】</p>	<p>前期と比べて+5%、昨年同期と比べて+8%であるが、生徒に紹介している本の平均冊数が昨年より若干減少しているのが気になる。生徒対象の読書アンケート（12月）において「本を読むきっかけ」の項目で、課題研究の「錦丘ゼミ」と答えた生徒もいた。「先生のお薦めの1冊」の取り組みだけで終わることなく、教員全体で1冊でも多く継続的に紹介していくような環境を整えたい。</p>
<p>④ 学力スタンダードの到達目標の到達度をはかる問題作成を視野に置きながら、論理的思考力を高めるために必要な試験問題の作成について教科全体で検討する。</p>	<p>年間を通して論理的思考力を問う問題の割合（点数換算）の平均値が  A 15%以上である  B 10%以上である  C 5%以上である  D 5%未満である</p>	<p>1・2年生の2学期期末試験、3年生の学年末試験の状況から  【判定：B】</p>	<p>2学期末試験（3年の学年末試験）における「思考力を問う問題」の出題の割合は、概ね10～15%であった。思考力を問う問題として適切かどうか、教科全体で、継続して検討することが必要である。覚えたことを再生する力を問うだけでなく、論理的思考力を高める問題作成に努めたい。</p>
<p>学校関係者評価委員会の評価</p>	<p>・知識を積み重ねて発想に結びつけるには、「書物を読む」ところによる部分はまだ多い。読書によって、基礎学力を伸ばし、知識を蓄えることで、将来的に伸びが大きく違ってくる。いかに総合的な人間力を身に付けさせるかということが大切である。</p>		
<p>学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針</p>	<p>・「新書を読もう」など学校ぐるみの取り組みを継続するとともに、授業や次年度から行う課題研究を通して、世界的・社会的事象などにも興味関心を持たせることで、読書量を増やしたいと考えている。また、今後も、中高合同の校内ビブリオバトル大会や文芸活動など、図書館が中心となって、生徒たちの読書の機運をさらに盛り上げていきたい。</p>		

**【重点目標3】 学習、進路、生活、部活動等を有機的に結びつけ、より自立的内発的に取り組むことのできる、実践力のある生徒を育成する。**

具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
① 中学校と連携しながら、三点固定（学習開始時間、就寝時間、起床時間の固定）を図り、生活リズムを自ら整える態度を身につけさせる。	遅刻をする生徒は一日平均で A 5人未満である B 6人未満である C 7人未満である D 7人以上である  「下校時間を守っている」生徒の割合が A 90%以上である B 85%以上である C 80%以上である D 80%未満である	遅刻調査（4～3月） 1日平均の遅刻者数11.4人 【判定：D】  学習・健康・生活に関するアンケート（12月） 下校時間を守っている生徒 全学年平均89.9% 【判定：B】	一日平均の遅刻者は昨年度7.0人、今年度11.4人と増加した。原因は体調不良による遅刻者の増加と大雪による遅刻者の増加である。その他の理由によるものはほぼ変わらない。体調不良によるものは昨年度506人から今年度753人と増えている。ストレスなどから体調を崩す生徒が増えており、担任・学年・保健室・相談室との連携を密にし、素早い対応や支援を行っていく必要である。 下校時間を守っている生徒の割合は、昨年度84.2%から大幅に改善した。ほぼ目標を達成することができたが、今後も学年や部活動顧問とも連携し95%に近づけるように努めたい。
② 家庭学習時間調査による生徒の自省や様々な視点からの学年集会及び講演等における示唆を通じて、学習意欲を高めるとともに、生活全般において自立的・内発的な行動をとることができるよう働きかける。	目標時間を達成している生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である  「シラバスを定期的に活用した」教員の割合が A 60%以上である B 50%以上である C 40%以上である D 40%未満である	学習・健康・生活に関するアンケート（12月） 目標達成率（平日） 1年60.5% 2年24.5% 3年70.6% 全学年51.8% 目標達成率（休日） 1年35.0% 2年30.0% 3年62.5% 全学年42.5% 【判定：D】  職員アンケート（12月） 「定期的に活用した」55% （単元ごとに活用12%＋定期試験ごとに活用43%） 【判定：B】	全学年の目標達成率は、前期と比べて、平日＋9%、休日＋11%であった。学年別にみると平日・休日とも、3年生が増加しているのに対して、1年生は減少しており（平日－6.8%、休日－8.7%）、2年生は変化がない。平日の予習・復習の取り組みませ方、休日の課題の与え方についてアイデアを出し合い、量だけではなく質も伴った学習に繋げたい。  前期と比べて－4%であるが、教員は定期試験ごとに活用している状況がみられる。一方、生徒については、シラバスを活用して計画的に学習を進めている割合は12%で、変化はなかった。シラバスの具体的な使用方法（例えば、単元ごとの到達目標を確認する、定期試験の目標点を記入する等）を、機会を捉えて生徒に繰り返し伝え、シラバスの活用に繋げたい。
③ 部活動に所属している生徒の積極的な挨拶を核にして、生徒一人一人が自発的に挨拶できるような雰囲気醸成し、気持ちよく授業を受けられる環境を整える。	「学校生活において、挨拶を積極的に行っている」生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	生徒アンケート（12月） 挨拶を積極的に行っている生徒 72%（校外からの来校者にも積極的に挨拶している28%、友人や教職員には自分から挨拶している44%） 【判定：B】	前期と比べて－3%であった。挨拶を積極的に行っている生徒は72%で、ある程度高い結果となった。しかしながら、保護者のアンケートでは挨拶がしっかりできていないといった意見が寄せられている。今後も朝の挨拶運動や日々の授業、部活動を通して、継続的・日常的に挨拶への意識を高めていく必要がある。
④ 部活動において、限られた時間を有効に活用させることによって、自主性自立性の育成と部活動の活性化を図る。	部活動加入率が A 90%以上である B 85%以上である C 80%以上である D 80%未満である  1、2年生で「部活動と学習の両立ができている」と思う生徒の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	部活動加入状況（10月） 1年 男子 95% 女子 98% 2年 男子 81% 女子 87%  学校全体 90.1% 【判定：A】  学習・健康・生活に関するアンケート（12月） 「部活動と学習の両立ができている」 1年 60.7% 2年 58% 全体 59.3% 【判定：C】	全学年を通して部活動加入率が高く、安定した数値となっている。部活動は人間形成において重要な役割を果たしており、学習との両立が高校生活をより充実したものにする。今後もこの加入率が大きく下がることのないよう、ホーム担任や顧問による生徒へのケアを大切にしていきたい。退部する生徒のほとんどが部活動と学習の両立のできないことを理由として挙げていることから、成績の伸び悩んでいる生徒に対する十分な配慮が必要である。なお、保護者アンケートで「部活動は、学習と両立できるよう適切に行われている」と感じているの割合が77%と高い数値を示しているのは心強い。

<p>⑤ 生徒会主催の行事を生徒が中心となって企画運営し、今後、社会人として求められる自主的自立的な態度や実践的な行動力を育成する。</p>	<p>「各行事において、生徒の自主性を高める指導を行い、自主性は高まった」と思う職員の割合が  A 80%以上である  B 70%以上である  C 60%以上である  D 60%未満である</p> <p>「生徒会主催の行事は生徒の自主的な態度を育てている」と思う生徒の割合が  A 80%以上である  B 70%以上である  C 60%以上である  D 60%未満である</p>	<p>職員アンケート（12月）  「自主性を高める指導を行っており、自主性は高まっている」73%  （当てはまる11%+やや当てはまる62%）  【判定：B】</p> <p>生徒アンケート（12月）  「生徒会主催の行事は生徒の自主的な態度を育てている」71%  （当てはまる24%+やや当てはまる47%）  【判定：B】</p>	<p>前期と比べて、職員アンケートでは+6%、生徒アンケートで+2%あった。紫錦祭における取り組みに対する評価が反映されて、自主性に対する職員の意識も生徒の意識も高まり、改善しようとする動きが見られる。今後も、生徒の自主性を重んじた教職員の適切なサポートを促していきたい。</p>
<p>⑥ 学校、地域の環境美化に努め、活動に積極的に取り組むことで、環境ISO活動参画の推進と更なる環境保全に対する意識の向上を図る。</p>	<p>3月職員会議「ゴミ排出量&amp;紙リサイクル量」の測定結果報告において、各クラスの年間のゴミ排出量が昨年の量と比較して  A 5%以上の削減  B 3~5%の削減  C 0~2%の削減  D 増加</p>	<p>生徒美化委員会による測定値（4月~3月）  可燃ゴミと容器包装プラゴミの合計  28年度 1067.8kg → 29年度 992.5kg  昨年比 92.9% (-7.1%)  【判定：A】</p>	<p>中間評価でのゴミの量の増加傾向を受け、省エネ・ゴミ削減のポスター展示による啓発活動を行った。その効果もあって、目標を達成することができた。ただ、学年別にみると、2年生では、1クラス多いことを考慮しても増加傾向にある（28年度 335.5kg → 29年度 394.3kg 昨年比 117.5%）。美化委員会による分別の呼びかけもあり、1、2年生の可燃ゴミの中のプリント類は減ってきている。来年度は、更に個人ゴミの持ち帰りを呼びかけ、分別のマナーの徹底とゴミ削減を図っていきたい。</p>
<p>⑦ 担任、学年、生徒指導室、保健室、相談室、部顧問が十分に情報を共有し、課題や悩みを抱えた生徒を早期に発見し、自発的解決に向けて協力する。</p>	<p>「関係教職員の情報共有により、問題を抱えた生徒を早期に把握し対応している」と思う職員の割合が  A 80%以上である  B 70%以上である  C 60%以上である  D 60%未満である</p>	<p>職員アンケート（12月）  「対応ができています」97%  （よくできている18%+ほぼできている79%）  【判定：A】</p>	<p>肯定的な評価が多数を占めるが、「よくできている」に関しては18%にとどまっており、十分とは言えない状態である。情報の共有や協力は早期にできていても、その後の対応が生徒にとって最善の解決まで結びつかないケースもあると思われる。協力体制を更に向上させ、保護者や外部機関との連携も強め、問題解決に向けて努力していきたい。</p>
<p>⑧ 学年通信や進路だより等を通して保護者に学校の様子を伝えるとともに、PTA活動や学校行事への参加拡大を図り、家庭との連携を強める。</p>	<p>「学年通信や進路だより・行事案内など学校からの情報を見ている」保護者の割合が  A 80%以上である  B 75%以上である  C 70%以上である  D 70%未満である</p> <p>PTA主催の行事に参加する保護者の数が、延べで  A 1,000人以上である  B 800人以上である  C 600人以上である  D 600人未満である</p>	<p>保護者アンケート（12月）  「学校からの情報を見ている」73%  （当てはまる34%+やや当てはまる39%）  【判定：C】</p> <p>PTA主催の行事に参加した保護者の数は延べで、現在950名である。  【判定：B】</p>	<p>学年通信や進路だより発行の際、保護者にメールで通知してきた。肯定的評価の割合は、ここ2~3年の間はほぼ変わらず、例年前期でB評価、後期でC評価であるため、メールでの効果はこれが限度と考えられる。しかしながら、メール配信がないと、受け取った「学年だより」等を保護者に見せないままになってしまうことが多く、継続していく必要はある。</p> <p>参加延べ人数は、PTA総会、6月自転車マナー一斉指導、7月進学講座、紫錦祭PTA模擬店、9月自転車マナー一斉指導、9月進学講座に参加した保護者の合計数である。PTA役員等の熱心な活動の結果、多くの保護者が行事に参加し、本校教育活動に対する理解を深めてもらうことができた。</p>
<p>学校関係者評価委員会の評価</p>	<p>・遅刻が多くなっているところが気になる。スマートフォンの使用が原因の一つになっていると思う。学習時間や睡眠時間を奪うだけでなく、SNS等によるトラブルなど、生徒の心身の不調にもつながっている。一校だけではなく全国的な問題として取り組まないといけない。  ・スマートフォンの使用については、他県の取り組みではあるが、積極的に学習の中で使用させることで、情報機器との距離感をつかませて、無駄な使い方を減らす試みをしているところがある。使用時間が3時間を超えると学力の伸びに影響が出るという調査結果もあるので、継続した指導をしていただきたい。</p>		
<p>学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>	<p>・生徒だけでは不十分なので、保護者に対して、入学式の日「スマホ・ケータイ安全教室」を開催し、長時間使用が生活に及ぼす影響、SNS利用時に起きるトラブルなどについて注意喚起し、家庭での使用上のルール作りを勧めている。  ・スマートフォンの適切な使用と起床・学習開始・就寝時刻の3点固定、遅刻指導を関連付けて、生徒指導に当たっている。どのようにメディアリテラシーを身に付けさせるかは難しいが、今後は、制限するだけではなく、積極的に使用することで、情報を主体的に引き出し、その真偽を見抜き、活用する能力を付ける経験をさせていくことが必要である。</p>		